

博士論文の要旨及び審査結果の要旨

氏名	上村 賢介
学位	博士 (医学)
学位記番号	新大院博 (医) 第 848 号
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
博士論文名	Cancers among adolescents and young adults at one institution in Japan (新潟大学医歯学総合病院における AYA 世代がんの臨床的解析)
論文審査委員	主査 教授 齋藤 昭彦 副査 准教授 木下 義晶 副査 教授 西條 康夫

博士論文の要旨

【背景と目的】 AYA (adolescents and young adults) 世代のがんは希少であり多様な特徴を示す。AYA 世代では入学, 就職, 結婚, 出産, 育児など多くの社会的変化があり, がん治療はその後の人生に大きな影響を与えるために様々な支援が必要となる。AYA 世代の定義は世界で統一されていない。米国国立がん研究所による SEER (Surveillance, Epidemiology, and End Results) program は, 15-29 歳を AYA 世代と定義していたが, 最近では 15-39 歳に拡大された。しかし, 30-39 歳のがん種分布は 40 歳以上と類似していること, AYA 世代特有の社会的変化は 15-29 歳に多く経験されることから, 本研究では AYA 世代を 15-29 歳と定義した。日本においては, AYA 世代のがん種や発生率についての報告はあるが, 治療結果や社会的状況を含めた詳細な報告はないため調査・解析を行った。

【方法】新潟大学医歯学総合病院における 2007-2015 年の院内がん登録データ及び電子カルテを用いて患者データを収集し, 後ろ向きに調査した。15-29 歳を AYA 世代と定義し, がん種, 治療方法, 治療結果, 妊孕性温存, 結婚, 育児, 職業について性別, 年齢 (15-19, 20-24, 25-29 歳) により解析した。がん種は, SEER AYA Site Recode Classification/WHO 2008 Definition により分類した。結婚, 育児, 職業については, 診断時と最終確認時の状況を調査解析した。

【結果】 AYA 世代のがん患者は, 院内がん登録 (n=18,663) のうち 1.9% (n=362) であった。女性が 67.1% (n=243) であり, 男性 32.9% (n=119) よりも多かった。がん種については, Carcinomas が男性 29.4%, 女性 58.0% でそれぞれ最も多かった。女性では Carcinoma of genitourinary tract (28.0%) の割合が多く, Cervical cancer が大部分を占めた (25.1%)。年齢は, 15-19 歳は 21.8% (n=79), 20-24 歳は 27.3% (n=99), 25-29 歳は 50.8% (n=184) であった。Carcinomas が各年齢群で最も多く, 年齢の上昇と共にその割合が上昇した。一方で, Germ cell and trophoblastic neoplasms, Osseous & chondromatous neoplasms, Soft tissue sarcomas の割合は年齢の上昇と共に減少した。治療方法については, Surgery (n=228) が最も多く, Chemotherapy (n=136), Radiation (n=90) が続いた。集学的治療で最も多かったのは Surgery + Chemotherapy (n=44) であった。妊孕性温存は 20.3% に施行されており, 妊孕性温存手術が最も多かった (16.0%)。5 年全生存率は, 女性 (88.4%) が男性 (79.9%) よりも優れていた。年齢による治療成績の比較では, 15-19 歳が 25-29 歳よりも有意に悪かった ($p < 0.017$)。結婚している割合は, 年齢と共に上昇していた (15-19 歳 : 0/2.6% (診

断時/最終確認時) , 20-24 歳 : 9.5/21.1% , 25-29 歳 : 29.9/44.1%) 。育児をしている割合は、年齢と共に上昇していた (15-19 歳 : 0/1.3% (診断時/最終確認時) , 20-24 歳 : 7.4/15.8% , 25-29 歳 : 19.8/33.9%) 。妊孕性温存を実施していた場合は、結婚 (50.7%) , 育児 (39.4%) をしている割合が有意に高かった ($p < 0.001$) 。職業については、無職の割合は、15-19 歳、20-24 歳においては診断時よりも最終確認時が有意に多かった ($p < 0.05$) 。最も無職の割合が多かったのは20-24 歳の最終確認時であった (15-19 歳 : 1.3/9.0% (診断時/最終確認時) , 20-24 歳 : 3.2/12.6% , 25-29 歳 : 4.5/7.9%) 。

【考察】日本人の AYA 世代においてもがん種は多様であった。SEER のデータと比較すると、Carcinoma of genitourinary tract が多く、Melanoma や Skin carcinomas は少ない傾向が認められた。妊孕性温存は 20.3% で実施されており、更なる啓発の必要性が考えられた。職業については、診断時よりも最終確認時に無職の割合が高くなる傾向が認められた。AYA 世代のがん診療においては、治療の研究に加え、更なる社会的・経済的支援の必要性が考えられた。

審査結果の要旨

AYA (Adolescent and Young Adult) 世代のがんは希少であり多様な特徴を示すが、特に多くの社会的変化があり、様々な支援が必要となる。申請者は、日本における AYA 世代のがんについての治療結果や社会的状況を含めた詳細な報告はないため、調査・解析を行った。15-29 歳を AYA 世代と定義し、新潟大学医歯学総合病院における 2007-2015 年の院内がん登録データ及び電子カルテを用いて調査した。その結果、AYA 世代のがん患者は全体の 1.9% であり、女性が男性よりも多かった。がん種は Carcinomas が男性、女性共に最も多く、治療方法は手術が最も多かった。妊孕性温存は 20.3% に施行されていた。5 年全生存率は女性が男性よりも優れていた。結婚・育児をしている割合は年齢と共に上昇していた。最も無職の割合が多かったのは 20-24 歳の最終確認時であった。日本人の AYA 世代においてもがん種は多様であり、世界の SEER (Surveillance, Epidemiology and End Results) データと比較すると、泌尿器系の Carcinoma が多く、メラノーマや皮膚がんは少なかった。AYA 世代のがんに対する更なる妊孕性温存の啓発や、社会的・経済的支援の必要性が考えられた。以上より、国内での AYA 世代のがん患者の実態を報告した点で、学位論文としての価値を認める。